

隔り切った組織の実態を継続してウォッチする 第八十四弾

神社本庁再生への道—その四十七—

神道界上層部で実践展開中の「世にも奇妙な物語」—
ドラマも顔負けの神社本庁と都神社庁を巡る怪奇現象

藤原登 (フリーライター)

神社本庁評議員会続報

タレントのタモリが進行役をつとめる長寿番組「世にも奇妙な物語」は、オムニバス形式のフィクションドラマである。社会風刺を織り交ぜた話の展開が絶妙で、平凡な日々の暮らしをおくる我々庶民に、異次元の仮想空間を体験させてくれる番組の一つである。

十月二十四日に開催された神社本庁評議員会については、十一月号で概略に触れた。出席した評議員の大半は、鷹司統理に

鷹司統理の決意と信念を甘く見た田中一派は、調子に乗って踏み越えてはならない一線をも欲にまみれた土足で踏み込もうとしたことで、これまで事態を静観していた評議員まで敵に回したようだ。

対して強圧的に自らを総長に指名せよと迫る田中執行部のやり口に、強い憤りを抱いて神社本庁を後にしたようだ。

田中「なほ在任」総長の一派は、代理人である小川尚史弁護士を中心に、鷹司統理の指名を得るための秘策を練っていたようだ。その秘策とは、最高裁で判決が確定し、芦原理事の敗訴が決定した総長選任裁判の結果を利用して、鷹司統理が田中氏を総長に指名しないことが、あたかも最高裁の判断に反する行為であると思えるような仮想空間を議場の中に作り出して評議員の判断を迷わせ、あわよくば統理から指名を略取しようというものであったと思われる。

それこそだろう。「それで指名しないなら理由を示せ」と、あまりに非礼な文書を直接統理に送り付けるなど、田中執行部のやり方は露骨で、普段はおとなしい神道人をも怒らせるに充分なものであったからだ。

総長選任裁判の結果は、総長の選任には役員会の議決と統理の指名が必要であるから、統理の指名があっても役員会の議決を与えた相手に送るのである。手紙はない。何せ迷惑や損害を与えた相手に送るのである。当事者が本当に反省しているか否かは、被害を受けた側がその文面を見れば、大方予想はつくものだ。だから、本当に反省していない人物には詫び状を書けないし、書いても益々相手を怒らせるだけだ。

先月中旬、東京都神社庁管内神職宛に、小野庁長と都神社庁役員会から別々に詫び状が届いた。経験がある読者はよくわかる通り、詫び状ほど書くのが難しい手紙はない。何せ迷惑や損害を与えた相手に送るのである。当事者が本当に反省しているか否かは、被害を受けた側がその文面を見れば、大方予想はつくものだ。だから、本当に反省していない人物には詫び状を書けないし、書いても益々相手

間に来た出来事の複雑怪奇さ及びお粗末さを踏まえて、「自浄、JP」に掲載されている文面をみる限り、小野庁長の詫び状には、お詫びの気持ちが無さそうに感じた。例えは、冒頭に「このたびは元職員の手紙送検につき新聞等に報道されましたことは甚だ遺憾であり、管内神職の皆様にご迷惑をお掛けいたしました。心から深くお詫び申し上げます。」とあるが、元職員による横領事件を遺憾に感じ詫びているのではなく、新聞報道されたことを詫びているように受け取れる。

更には、「事実関係について不明確なところも多く、それらを明らかにすべく警察に刑事告訴した」との文言も出てくるが、神社本庁による事実関係の調査を済ませていたのみならず、刑事告訴に最後まで反対していた小野庁長の振る舞いを知るものは、小野氏に対する不信感を益々募らせたことと拝察する。ダメな詫び状の典型例であり、何らかの目的でアライバイ作りのために出したものであろうと関係者は推測しているが、何とこの詫び

しかし、平凡な暮らしの有り難さを知らない者、それを蔑む者は、自ら現実の世界で奇妙な物語を演じ、他人の平凡な日常を破壊しても顧みることがない。今の神道界のトップの地位にある人たちの振る舞いを見てみると、そう思わざるを得ない。

たこと何で勘違いしたのか、もでない限り、そこに司法を

考えてもみろがいい。統理は宗教団体である神社本庁の代表者である。その統理の判断が、統一教会のように刑法に触れる

間に来た出来事の複雑怪奇さ及びお粗末さを踏まえて、「自浄、JP」に掲載されている文面をみる限り、小野庁長の詫び状には、お詫びの気持ちが無さそうに感じた。例えは、冒頭に「このたびは元職員の手紙送検につき新聞等に報道されましたことは甚だ遺憾であり、管内神職の皆様にご迷惑をお掛けいたしました。心から深くお詫び申し上げます。」とあるが、元職員による横領事件を遺憾に感じ詫びているのではなく、新聞報道されたことを詫びているように受け取れる。

更には、「事実関係について不明確なところも多く、それらを明らかにすべく警察に刑事告訴した」との文言も出てくるが、神社本庁による事実関係の調査を済ませていたのみならず、刑事告訴に最後まで反対していた小野庁長の振る舞いを知るものは、小野氏に対する不信感を益々募らせたことと拝察する。ダメな詫び状の典型例であり、何らかの目的でアライバイ作りのために出したものであろうと関係者は推測しているが、何とこの詫び

間に来た出来事の複雑怪奇さ及びお粗末さを踏まえて、「自浄、JP」に掲載されている文面をみる限り、小野庁長の詫び状には、お詫びの気持ちが無さそうに感じた。例えは、冒頭に「このたびは元職員の手紙送検につき新聞等に報道されましたことは甚だ遺憾であり、管内神職の皆様にご迷惑をお掛けいたしました。心から深くお詫び申し上げます。」とあるが、元職員による横領事件を遺憾に感じ詫びているのではなく、新聞報道されたことを詫びているように受け取れる。

更には、「事実関係について不明確なところも多く、それらを明らかにすべく警察に刑事告訴した」との文言も出てくるが、神社本庁による事実関係の調査を済ませていたのみならず、刑事告訴に最後まで反対していた小野庁長の振る舞いを知るものは、小野氏に対する不信感を益々募らせたことと拝察する。ダメな詫び状の典型例であり、何らかの目的でアライバイ作りのために出したものであろうと関係者は推測しているが、何とこの詫び

藤原登 (ふじわらのぼる)

昭和二十八年、東京に生まれる。広告代理店勤務の傍ら、歴史、宗教、哲学を学ぶ。現在は同人誌を中心に寄稿している。